

空間・モビリティ・地域観光とメタ観光をめぐる一試論

A consideration on Space, Mobility, Regional Tourism and Meta-Tourism

一橋大学大学院社会学研究科・博士後期課程 伊藤 将人

概要

本稿は過去数十年の間に社会科学で生じた二つの転回（空間論的転回・移動論的転回）以降の潮流にメタ観光を位置づけ両者の課題と可能性を考察することで、メタ観光の特徴や意義、学術研究としての発展と地域観光への応用を推進する際の課題と具体的な方法を社会的視座から検討した。その結果、メタ観光において重要な GPS や GIS、ICT などの「デジタル技術」と「歴史的文脈」が、二つの転回との関連を考える上で鍵となることが示唆された。またモビリティ研究における議論をもとにメタ観光がかかえる課題とそれを乗り越える具体的な方法として「政治的文脈への着目」と「言説の分析」という新たな視点を提示することで、メタ観光をめぐる学術研究と地域観光と関連した実践のさらなる発展可能性について論じた。

1. はじめに

近代の知は長い間、空間を「死んだもの、固定されたもの、不動のもの (Foucault, 1986)」とみなす認識枠組みの上に定義され、線形的思考に貫かれた均質な空間認識とそれにもとづく視覚優位体制の下にあった (吉原, 2022)。こうした認識はモビリティ (移動性 / 可動性) にも当てはまり、線形的思考に貫かれた均質で固定的な認識は社会階層移動以外のモビリティへの着目を妨げてきた。しかし社会科学における「空間論的転回 (spatial turn)」とそれをより深く更新した「移動論的転回 (mobility turn)」を経て、現在は空間やモビリティの捉え方を見直す機運が高まっている。本稿のテーマであるメタ観光と「地域観光」は、従来の固定的な認識から流動的な側面にも関心が集まりつつある「地域」と、現代社会におけるモビリティの高まりが最も明白な形で表れた「観光」が組み合わせられた言葉である。そこで本稿は社会科学における過去数十年の転回以降の潮流の中でメタ観光を考察することで、その特徴や意義、学術研究と地域観光振興への実践を推進する際の課題と具体的な方法を社会的視座から検討することを試みる。

2. 社会科学における空間論的転回・移動論的転回

メタ観光を論じる前に、日本では未だ紹介が停滞している空間とモビリティを取り巻く社会科学の動向を紹介する。モビリティは過去 20、30 年のうちに社会科学における特徴的な研究対象となり、欧米を中心に移動論的転回 (New Mobility Paradigm と呼ばれる) が宣言された (Hannam, Sheller and Urry, 2006) (Sheller and Urry, 2006)。しかし日本では最近まで移動論的転回をめぐる研究の進捗は芳しくなく遅れをとってきた。理由の一つには、主に社会学におけるモビリティ研究の水脈をなす空間論的転回への関心の低さがある (吉原, 2022)。

空間論的転回とは現代の都市や社会の構造、それを貫く論理を、空間をめぐる社会的な諸関係とそれを貫く論理として捉えようとする空間論的な問題意識をゆるやかに共有し、また相互に影響を与え合ってもいることを指す (若林, 1997)。身も蓋もなく言ってしまうと、空間構造は社会構造なくして理論化できず、逆もまた然りということである (大城, 2021)。こうした試みが「転回 (turn)」と呼ばれるのは、とりわけ古典的マルクス主義の社会

1 例えば昨今は従来都市 - 農村の二項対立で捉えられてきた地域としての農村をめぐる、都市から移り住む移住者や農村間を移動する人々、定期的に訪れる関係人口などへの注目が高まっており、その成員の非固定性、農村空間の流動性の高まりが指摘されている。

理論の「時間論的偏向」ないし「没空間論的偏向」からの理論的転回として構想、理解されたからである（若林, 1997）。

空間論的転回はアンリ・ルフェーブルの『空間の生産（1974=2000）』を契機に1970年代に登場拡大した概念とされるが、1980年代になるとドリーン・マッシーによる『空間的分業（1984=2000）』や、デレク・グレゴリーとジョン・アーリによる *Social Relations and Spatial Structures*（1985）が刊行され、地理学と社会学における空間にまつわる議論の社会科学への貢献が集約された（Sheller, 2017）。グレゴリーとアーリが提案した空間を容器や実体そのものではなく実体間の関係の集合として捉えるアプローチは、その後の『社会を超える社会学（Urry, 2000=2006）』などにつながっていくこととなる（Sheller, 2017）。

空間論的転回とそれに起因するアプローチの発展を経て、1990年代から2000年代に入ると経済、文化、グローバル化の変化に関する様々な分析でモビリティ概念の重要性が高まった²。これが移動のもたらす社会的諸関係の変容に焦点を当て、社会科学の理論と方法を新たに提示した移動論的転回である。初期の主要論者はマルク・オジェ（1992=2017）、ジグムント・バウマン（1998=2010, 2000=2001）、ジョン・アーリ（2000=2006）などである。特にバウマンの『リキッド・モダニティ』とアーリの『社会を超える社会学』は共に2000年に出版され、モビリティの定着に大きな役割を果たした（Sheller, 2017）。以降、モビリティ研究を支える一連の概念と研究群では、人・モノ・情報・知識といった様々な移動がいかに社会的に生み出されているか、社会がいかにそれらの移動によって / を介して生み出されているかなどが検討されている（田中, 2022）。こうした視点は多くの研究者に受容され関連する研究がグローバルに進められており（Elliott and Urry 2010=2016, Urry 2007=2015）、日本でもモビリティを主題として扱った書籍が登場している（切通ほか 2021, 鈴木・藤岡 2022, 吉原 2022）³。

ここまで空間論的転回と移動論的転回を説明してきたが、本稿の主眼は社会科学における転回を詳細に論じることにはない。ここで主張したいのは社会科学が過去数十年の間こうした転回を踏まえ空間や移動を論じようとしてきた潮流の上で、メタ観光の登場が捉えられ、メタ観光が転回以降の社会科学に新たな視座をもたらす可能性があるのではないかということ、そして転回とその後の流れを踏まえてメタ観光を検討することで学術研究と実践の新たな可能性と課題、方法が見えてくるのではないかということである。

3. 二つの転回とメタ観光の関連：「デジタル技術」と「歴史的文脈」

社会科学における二つの転回とメタ観光はどのように関連するのだろうか。メタ観光は「GPS および GIS により位置情報を活用し、ある場所が本来有していた歴史的な文脈・文化的文脈に加え、複数のメタレベル情報を ICT により付与することで、多層的な観光的価値や魅力を一体的に運用する観光」と定義される⁴。以降はこの定義を参考にメタ観光の二つのキーワード、GPS や GIS、ICT などの「デジタル技術」と「歴史的な文脈」に注目して考察を深めてみたい。

2 なお社会学で空間的移動や地理的移動に重きを置いたのは2000年代以降のモビリティ研究が初めてではない。シカゴ学派の都市社会学者たちは1920年代から都市に移住する集団の移動や都市居住者や通勤者の日々の移動など空間的移動や地理的移動を扱っていた（Sheller, 2013）。ロバート・パークやアーネスト・バージェスといった当時のアメリカの都市社会学者は都市の急速な拡大に伴う立ち退きや社会の不安定化といった潜在的弊害を懸念しながらも、人間のモビリティという基本的能力に基づく都市の成長としてのモビリティを高く評価した（Sheller, 2013）。彼らに大きな影響を与えたドイツの社会学者ゲオルグ・ジンメルも近代都市生活の重要な側面として循環とモビリティの重要性を説いた。しかしその後社会学は階層移動に照準を合わせてきたため、階層移動研究が主な時代では空間移動は周辺化されてきた（Urry, 2000=2006）（吉原, 2022）。

3 観光研究分野は日本の中でも移動論的転回を踏まえた研究が比較的多い分野であり、大橋（2010）や阿部（2016）、寺岡（2017）遠藤（2017）（2018）などがある。

4 一般社団法人メタ観光推進機構、「メタ観光とは（閲覧日2023年2月4日, <https://metatourism.jp/metatourism/>）」

3-1. デジタル技術

メタ観光はGPSやGISにより位置情報を獲得し複数のメタレベル情報をICTで付与することで多層的に地域を捉えることを可能にする点に特徴がある。こうした特徴は情報化の結果と捉えられるが、情報化は観光の目的だけでなく観光時の行動も変化させてきた(菊地, 2020)。私たちが観光する際には、オンラインで交通手段や宿泊施設を予約し、スマートフォンの地図サービスを利用して目的地に移動し、口コミサイトで人気の観光地やレストランを訪れる(菊地, 2020)。これらの恩恵はデジタル技術の進歩と切り離して考えられない。アーリが掲げた移動論的転回の13の命題にはデジタル技術や移動システムの技術的進歩に関する問いも含まれているが、デジタル技術や移動システムの利用者はそれへの依存度合いがさらに高まる一方で、専門的知識の不足のためそれから阻害される者もさらに増えている側面もある(Urry, 2007=2015)⁵。

以上より移動論的転回以降のモビリティ研究では、日々変化する情報化社会におけるデジタル技術や移動システムへの着目が重要だとわかる。しかしモビリティ研究はこうした技術やシステムの重要性を理論レベルで指摘してきた一方で、特に日本では具体的事例を対象に分析したものは少なかった。そうした中でメタ観光はモビリティ研究におけるデジタル技術や移動システムへの着目を促すキッカケとなり、かつメタ観光の実践に伴うデータの蓄積と活用はモビリティ研究に新たな可能性をもたらすかもしれない。そうした取り組みの延長線上では、空間やモビリティを固定化された不動の対象とする従来の認識枠組みに対して、空間やモビリティのレイヤー性に着目しデジタル技術により可視化することで非線形的思考に基づく非均質的かつ重層性のある地域・地域観光をめぐる認識を提示できる可能性も高まるだろう。

3-2. 歴史的文脈

二つの転回が「転回」と呼ばれるのは、古典的マルクス主義の社会理論の「時間論的偏向」からの理論的転回として構想され、理解された側面があるからである。つまりそれらは、時間、歴史的な文脈を重視する社会理論を一部否定する形で登場した。そのため特に移動論的転回以降の議論は歴史的な文脈よりも、現在の感覚や事物(身体性・物質性など)を重視する傾向が強い。しかし観光を含むモビリティとは、それ自体が様々な歴史的な文脈の中で構築されるものである。ある地域を訪れるまで/訪れてからの交通インフラ、オンラインを通じたバーチャル空間での移動を伴う観光などは、それらが実現する/しない環境や制度が形成される過程、つまり短期間であっても時間的・歴史的な文脈の分析なしになぜその地域が観光地になったのか、なぜ観光客が訪れるのか/訪れないのかなどを論じることはできない。また観光対象それ自体も当初から観光スポットとなることを目的につくられたものを除くと、歴史的な文脈の中で観光対象化してきたものが大半である。地域観光における伝統の変容や創造をめぐる議論はその際たるものであろう。以上を踏まえると、モビリティ研究は現在の出来事や事物への関心とあわせて歴史的な文脈にも着目する必要があるといえる。また、鈴木が指摘するように史資料を通して過去をみる行為には個別の観光形態が無意識に(場合によっては意識的に)「フィクション」ではなく「フェイク」に近寄る可能性がある。しかしメタ観光は複数の観光形態を単一の場所もしくは空間を通してフィクションも歴史も同時に同系列に扱える可能性を有するため、「フィクション」ではなく「フェイク」に近寄るといった問題を乗り越えられる可能性がある(鈴木, 2021)。こうした指摘からはメタ観光における歴史的な文脈への関心の可能性が示唆され、それは正しい形で地域・地域観光の多様性や複雑性を捉えるために重要な視点となる。メタ観光は移動論的転回以降のモビリティ研究が抱えてきた歴史的な文脈の軽視という課題に対して警笛をならし、かつ歴史的な文脈をめぐる分析や実践の具体的な動向として新たな可能性を見いだせるといえる。

4. メタ観光をめぐる学術研究の発展への提案

ここまで社会科学における空間論的転回・移動論的転回とメタ観光の関連性をめぐる議論の展開可能性を論じてきた。筆者に与えられたテーマはメタ観光と「地域観光」であるが、一般的な観光全般と地域観光の違いをあげる

5 スマートフォンによる情報アクセスを前提とした観光地経営により、高齢者や目が不自由な人などの情報アクセス性がかえって低下し新たな情報アクセス格差が生じている事例などが当てはまる。

のならば、地域観光は対象をモノではなく空間として捉え、かつ空間を形成するモビリティを含む全てが生活者とも密接に関連している点にあるだろう。そこで最後にここまでの議論を踏まえた上でメタ観光をめぐる学術研究と地域観光との関連での実践をより発展させるための二つの具体的な提案を試みたい。

4-1. 「政治的文脈」への着目

第一の提案は地域観光をめぐる「政治的文脈」への着目である。従来のメタ観光をめぐる議論の多くはビジネスや地域活性の文脈で語られてきた。メタ観光の出自を考えれば当たり前であるが、筆者が専門とする社会学の観点からはこうした文脈のみでは学術研究としては不十分な側面もある。そこで提案するのが「政治的文脈」への着目である。観光は近代におけるモビリティの高まりの象徴であるが、モビリティ研究の観点から観光を捉えるならばそれは政治と切っても切り離せない。モビリティと政治の関連をめぐる研究は欧米を中心に蓄積されてきており、人・モノ・資本がいつどこで、どのように移動するかは政治的な問題であるという認識が重要である（Sheller, 2018）。

例えばメタ観光推進機構理事の牧野氏がメタ観光の一例として提示する東京都千代田区にある甘味処竹むらの事例の場合は、竹むらの建物を取り巻く都市計画や東京都景観条例など政治的なものとの相互作用の中で今日の景観や価値が形成されてきた側面があることは間違いない。裏を返せば歴史的文脈の中で、現在とは異なる都市計画により立ち退かざるをえなくなったり、景観条例に基づく歴史的建造物に選ばれず今とは異なる価値認識がされたりした可能性はゼロではない。同じくメタ観光推進機構理事の玉置氏がメタ観光の一例として提示するプラタモリも、各地域の政治的背景に着目し各時代の首長や武将などの有力者の政治的決断が地域の在り方を左右した話題を頻繁に扱っている。こうした事例からメタ観光をめぐる学術研究を推進する際には地域の政治的文脈も分析対象とすること、市民参加によるワークショップなどを通してメタ観光のレイヤーを整理・構築する際にも政治的文脈を考慮の対象とすることで、分析に厚みが生まれ予想外のレイヤー間の関連性や転換点が明らかになる可能性が高まると考えられる。

4-2. 「言説」への着目

第二の提案は地域観光をめぐる「言説(discourse)」への着目である。ミシェル・フーコーによれば言説とは、個々の言語表現たる言表が集合し、ある一つのまとまりをもった全体として構成されたものを指し、この全体性を形作るのは、個々の言語表現だけではなく制度や権力といった非言語的な要素を含むとされる（佐藤, 2013）。移動論的転回を牽引してきたミニ・シェラーとジョン・アーリ（2006）によれば、移動論的転回とは「移動の主体性」を特権化する問いではなく、むしろ移動に関する言説と実践の権力（実践の権力は第一の提案と重なる）を追うことに重きを置く。また高まるモビリティの重要性は、物質的世界で観察可能な実践だけでなく、変化する言説など的一部分と見なされるべきである（Endres and Manderscheid, Mincke, 2016）。

こうしたモビリティ研究の議論に従ってメタ観光を捉え直すと、メタ観光はコンテンツツウリズムに代表されるように当初から表象には大きな注意を払ってきた。コンテンツツウリズムとメタ観光について論じた山村(2021)も、共通点の一つに物語を軸にレイヤーが構成されている点を挙げている。それに対して地域観光を含むメタ観光の対象となる地域をめぐる言説は、これまであまり関心を寄せられてこなかった。しかし筆者はメタ観光が従来の個別の観光形態をメタ的視点から捉えるのと同様に、地域を取り巻く様々な出来事や歴史、文化、観光形態をメタ的視点から研究するためには言説への着目も必要であり意義があると考えている。

言説に着目することにより、新たな文脈で観光資源を見つけて可視化することで多様な楽しみ方を提供するメタ観光による地域観光において、そもそも何が「新しい文脈」で何が「従来から存在する文脈」で、それ以外に何が「文脈上存在してこなかったもの」なのか顕在化することが可能となる。フーコーの言葉を援用すれば「他でもなくなぜその時代に、ある特定の言説が登場したのか」を問うことが重要であると同時に、「なぜある言説は、それとは別の在り方ではあり得なかったのか」「ある時代に特定の言説が登場する一方で、なぜ他の言説は登場しなかったのか」という付随した新たな問いも生まれてくる点が言説を分析することの意義である（Foucault, 1969=2012）。こうした問いは学術研究だけでなく地域観光のためのメタ観光のワークショップなどでも有用であり、案内役や地域史家が語る地域の歴史や文化がなぜ他でもなくそのような言説になるのかを問うことで、従来

関心を寄せられてきたレイヤーとは別の、可視化されていないが存在した / 存在したかもしれないレイヤーの発見や構築へとつながる可能性がある。山村（2021）はコンテンツツーリズムから見たメタ観光の課題として想像性の余地の担保を指摘しているが、言説への着目にはこうした余地を拡張する可能性もあるだろう。

整理するとメタ観光における言説への着目はより詳細で多様なレイヤーの構築を可能とする。同時にある人が認識できるレイヤーとは異なるレイヤーを顕在化させ想像力を担保したり幅を拡げたりする可能性がある。言説の分析とは、あたら限り多くの対象となる地域やコンテンツに関連する書かれたものを収集し、何が書かれ何が書かれていないのかを整理する作業である。しかし現実的には限られた時間の中で全ての言説は対象とできないため、例えばデジタルアーカイブで閲覧できる新聞記事や、国立国会図書館や大宅壮一文庫で取り寄せられる雑誌記事、地域の図書館に収蔵された過去の観光パンフレットや広報などの言説を分析することで、地域観光振興のためのワークショップなどの場ではメタ観光マップのレイヤーの重層性や複雑性が増すとともに、学術研究としても従来とは異なる手法で成果と意義を示せるのではないだろうか。

5. おわりに

本稿は社会科学における空間論的転回と移動論的転回を踏まえ、その潮流の中にメタ観光を位置づけた際のメタ観光の特徴（歴史的文脈の重視・デジタル技術や移動システムへの着目）を指摘し、学術研究の推進や地域観光振興に役立てる際の課題とそれを乗り越える具体的な方法（政治的文脈・言説の分析）を提案してきた。

メタ観光は複数のレイヤーにまたがる観光客という存在を捉える際に、既存の観光業や観光学の議論ではレイヤーごとに完結した観光の在り方しか見ていないこと、情報社会特有の新しい観光現象に既存の枠組みでは気づけないことなどを課題と捉え登場した。こうした課題意識は、観光客だけでなく現在の地域や地域観光を捉える際にも重要である。現代社会において地域という空間は特定のレイヤーや見方で完結した固定的な容器や実体ではなく、実体間の関係の集合で成立する流動的で社会的なものとなりつつ / 認識する必要が高まりつつあり、それを捉えるための従来とは異なるメタの視点が求められている。これは地域観光についても同様のことがいえる。空間論的転回や移動論的転回は学術的議論であるが、その登場は従来の地域や空間、移動の認識では捉えられない事態が、グローバルでもローカルでも生じていることと不可分に結びついている。本稿が二つの転回と二つのメタ観光の特徴に言及したのは、こうした時代に地域や地域観光を考える上で示唆的であり、かつメタ観光が学術研究として発展し地域観光に生かされていくために外せないと考えたためである。また本稿が提案した二つのメタ観光の課題とそれを乗り越える具体的方法は、一見すると些細で必要ないように思える観点を意識するかしないかで地域や地域観光とメタ観光をめぐる認識や実践の厚みが変わり、増した厚みはメタ観光の学術的・実践的発展につながると考えたためである。筆者はメタ観光の専門家ではないためはずれな指摘かもしれないが、モビリティ研究、そして地域振興の現場に関わる人間としてメタ観光の今後の発展に期待したい。

参考文献

- Augé, M. (1992) *Non-Places: An Introduction to Anthropology of Supermodernity*, Paris: Le Seuil. (=2017, 中川真知子訳『非-場所—スーパーモダニティの人類学に向けて』水声社)
- Bauman, Z. (1998) *Globalization: The Human Consequences*, Columbia University Press. (=2010, 澤田眞治・中井愛子訳『グローバリゼーション』法政大学出版局)
- Bauman, Z. (2000) *Liquid Modernity*, Polity Press. (=2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティ—液化化する社会』大月書店)
- Doughty, K. and Murray, L. (2016) *Discourses of Mobility: Institutions, Everyday Lives and Embodiment, Mobilities*, 11 (2) : 303-322. (= 2022, 田中雅大訳「モビリティの言説—制度・日常生活・身体化—」『空間・社会・地理思想』25 : 135-151)
- Elliot, A. and Urry, J. (2010) *Mobile Lives*. Routledge: Abingdon. (=2016, 遠藤英樹監訳『モバイル・ライブズ——「移動」が社会を変える』ミネルヴァ書房)
- Endres, M. Manderscheid, K. and Mincke, C. (2016) *Discourses and ideologies of mobility : An introduction. The Mobilities Paradigm : Discourses and ideologies*, Routledge, 1-7.

- Foucault, M. (1969) *L'Archéologie du savoir*, Paris, Gallimard. (= 2012, 慎改康之訳『知の考古学』河出書房新社)
- Foucault, M. (1984) *a L'usage des Plaisirs: Histoire de la Sexualite II*, Mayenne : Gallimard. (= 1986, 田村俣訳『性の歴史II 快楽の活用』新潮社) .
- Gregory, D. and Urry, J. eds (1985) *Social Relations and Spatial Structures*, Basingstokc : Macmillan.
- Hannam, K. Sheller, M. and Urry, J. (2006) Editorial: Mobilities, immobilities and moorings, *Mobilities*, 1 : 1-22.
- Lefebvre, H. (1992) *The Production of Space*, Blackwall, Wiley Blackwell. (=2000, 斉藤日出治訳『空間の生産』青木書店) .
- Massey, D. B. (1995) *Spatial divisions of labor: Social structures and the geography of production* 2nd edition, New York : Routledge. (=2000, 富樫幸一・松橋公治訳『空間的分業—イギリス経済社会のリスストラクチャリング—』古今書院)
- Sheller, M. and Urry, J. (2006) The new mobilities paradigm, *Environment and Planning A*, 38 : 207-226.
- Sheller, M. (2013) *Sociology After the Mobilities Turn*, Adey, P. Bissell, D. Hannam, K. Merriman, P. Sheller, M, eds, *The Routledge Handbook of Mobilities*, London: Routledge. 45-54.
- Sheller, M. (2017) From Spatial turn to mobilities turn, *Current Sociology*, 65 (5) : 1-17.
- Sheller, M. (2018) *Mobility Justice: The Politics of Movement in an Age of Extremes*, VERSO.
- Urry, J. (2000) *Sociology beyond Societies: Mobilities for the Twenty-first Century*, Routledge. (=2006, 吉原直樹監訳『社会を超える社会学——移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版局)
- Urry, J. (2007) *Mobilities*. Cambridge: Polity Press. (=2015, 吉原直樹・伊藤嘉高訳『モビリティーズ——移動の社会学』作品社)
- 阿部純一郎 (2016) 「移動論的転回の中に「観光のまなざし」論を定位する」『観光学評論』4 (1) : 33-42.
- 遠藤英樹 (2017) 『ツーリズム・モビリティーズ：観光と移動の社会理論』ミネルヴァ書房 .
- 遠藤英樹 (2018) 「ツーリズム・モビリティーズ研究の意義と論点」『関西学院大学社会学部紀要』128: 9-20.
- 大城直樹 (2021) 「空間論的転回と新都市社会学・批判地理学」横浜国立大学都市科学部編『都市科学事典』春風社 , 916-917.
- 大橋昭一 (2010) 「モビリティ・パラダイム論の展開—モビリティ資本主義論の提起—」『和歌山大学観光学部紀要 観光学』3 : 11-21.
- 菊池映輝 (2020) 「情報社会における観光は「メタ観光」で捉えよう」『GLOCOM OPINION PAPER』33.
- 切通堅太郎・西藤真一・野村実・野村 宗訓 (2021) 『モビリティと地方創生一次世代の交通ネットワーク形成に向けて—』晃洋書房 .
- 佐藤雅浩 (2013) 『精神疾患言説の歴史社会学：「心の病」はなぜ流行するのか』新曜社 .
- 鈴木親彦 (2021) 「江戸資料のデジタル化情報空間からメタ観光への展開」オンライン公開勉強会「メタ観光の作り方を考える会」資料 .
- 鈴木謙介・藤岡達磨 (2022) 『グローバル化とモビリティ：流動化する社会を生きる人びとの社会学』関西学院大学出版会 .
- 寺岡伸悟 (2017) 「流動化する中山間地域と農村観光研究の意義」『観光学評論』5 (1) : 79-92.
- 山村高淑 (2021) 「メタ観光とコンテンツツーリズム」メタ観光オンラインシンポジウム vol.3 「メタ観光という観光」資料 .
- 吉原直樹 (2022) 『モビリティーズ・スタディーズ』ミネルヴァ書房 .
- 若林幹夫 (1997) 「空間と「場を占むもの」」『10 + 1』10 : 246-254.